

## 小さなお母さん

福井県立藤島高等学校

高橋 由季乃

ある日、私は掃除をしていると一つのアルバムを見つけた。母さんが子供だった頃から私が生まれ成長していくまでたくさん写真がそこにあった。そのまま見ていると母さんが来た。掃除を途中にしていたから怒られると私は思ったが、母さんも懐かしそうに一枚の写真を手を取った。岐阜から遊びに来た母さんの両親と家族みんなでお花見に行った時のものだ。このアルバムの中には何枚もおばあちゃんが写っている写真があったがこの写真が一番綺麗な笑顔だった。いつもは厳しい母さんだがこの時は散らかしたことを何も怒らず、どこか寂しそうな声で言った。

「おばあちゃんね、ずっと弱音を吐いてこなかったのよ。あの夏、電話で言ったのが最初で最後だったなあ。」

おばあちゃんはいつも笑っていて明るい人だった。娘である母さんとその三人の弟はもちろん、私たち孫もとても可愛がってくれた。実は癌でここ数年入院を繰り返していたが、会いに行けばいつも笑顔で迎えてくれた。

八月の日曜日、そんなおばあちゃんが母さんに電話をかけた。おばあちゃんの具合が良くないのだとその時私は母さんから聞いた。母さんはおばあちゃんの所へ行くことにしたが、父さんは仕事で、弟は部活があったので私も家に残ることにした。そして母さんの代わりに家事をすることを引き受けた。月曜日、母さんは岐阜へ出発し私は『小さなお母さん』になった。料理・洗濯・掃除：全てのことを一人するのは思っていた以上に変で、これらを毎日している「お母さん」ってすごいなあと改めて感じた。時々、母さんからメールが来た。

「荷物受け取れたかな？昼ごはんは食べたかな？おばあちゃん喋れるくらい元気です。」

母さんは「小さなお母さん」のことが心配なようだ。「大丈夫だよ。安心してね。」とだけ返信した。火曜日に「金曜日に帰ることになったのでそれまでよろしくね」と母さんからメールが来た。私は『次行けたらおばあちゃんに会いたいな』『帰ってきたら母さんにいつもありがとうって言いたいな』『これからはもっとお手伝いしなきゃ。』などと考えながら、頼もしい母さんが帰ってくるのを待っていた。しかし木曜日の昼、母さんから一本の電話が来た。：おばあちゃんが亡くなった、と。私たちが岐阜に到着したとき、母さんは喪主であるおじいちゃんと一緒に葬式の準備や親戚の挨拶など忙しそうに動き回っていた。母さんはずっと泣かなかった。お通夜でも葬式でも母さんは背筋を伸ばして立っていた。棺の中で眠るおばあちゃんを見て私たちが号泣した時間でさえ母さんは励ますかのように子供たちの頭を撫でた。順調に時間が流れ、いよいよ火葬がはじまる時だった。

「おかあさん…。」

私の隣から声が聞こえた。母さんの声だった。母さんは震えていて、顔を覆ったハンカチは涙で溢れていた。あんなに弱い母さんを私ははじめて見た。おばあちゃんは娘にとっても愛されている『お母さん』だった。そして、私と弟を育てて一家を支えている立派な母さんでも自分のお母さんがいる限り「小さなお母さん」だったのだ。そう私は思った。

古いアルバムをめくりながら母さんは続けて言った。

「電話でね、おばあちゃんは『辛い。もう駄目かもしれない。』って言ったの。こんなこと聞いたのはじめてだった。突然のことです。ドタバタしたけど、ゆっちゃんが家のことしてくれたから安心して四日間ずっとおばあちゃんの所にいられたんだよ。おばあちゃんにもゆっちゃんに伝えたいと言われたの。『ありがとう。ゆっちゃんはまだ小さなお母さんだね』って。」

この言葉を聞いて私はまた泣きそうになった。私は最後におばあちゃんに会えなかった。行っていけば良かったという気持ちが無いわけではない。だけど、あの夏の私の「小さなお母さん」はおばあちゃんへの最高の贈り物、母さんにとって一生忘れられない宝物となった。「小さなお母さん」をして本当に良かったと思っている。

私にとって母さんは憧れでかけがえのない存在だ。まだまだ母さんにはかないそうにない。だから母さんのそばでもっともっと成長したい。

「母さん、私風呂掃除しておくね。」

大好きな『お母さん』を目指して小さなお母さんは今日も一歩踏み出した。